

信仰と信者の義務 (12 : 12~29)

## ■はじめに

## 1. 手紙の背景と執筆目的

- (1) ヘブル人への手紙を書いた著者、そしてこの手紙を受け取った読者も、直接イエスを見聞きしたことはない第2世代のユダヤ人信者である。
- (2) この手紙が書かれた時期は、紀元64年から66年頃と推定される。ユダヤ人の間でローマ帝国に対する反乱の機運が高まる中、愛国主義的な同胞たちから教会に対する迫害が激しさを増していた。
- (3) 一部のユダヤ人信者の中には、迫害を鎮静化するため、いったんエルサレムの神殿祭儀に戻ろうという動きが出始めた。この背教の動きに対して、著者は警告のためにこの手紙を書いた。

## 2. 手紙の内容と11章・12章

- (1) ユダヤ教の三本柱は、「天使」、「モーセ」、「レビ族アロンの家系の祭司による祭儀」である。著者は、手紙の前半で、神の御子であるメシアは、天使にも、モーセにも、そしてアロンにも優ることを教える。
- (2) 手紙の後半は、前半の教えに基づき、信者はどのように歩むべきかを説明する。その中で、11章は、旧約聖書に記録された信仰の先輩たちの手本にならおうという部分である。彼らの手本を一言で言えば、苦難の中での忍耐である。
- (3) 12章では、「信仰の忍耐」の勧めについて語られる。
  - ① 1~11節・・・信仰と訓練
  - ② 12~29節・・・信仰と信者の義務
- (4) 本日は、12章12~29節 信仰と信者の義務 である。

## 3. 「信仰と信者の義務」(ヘブル12 : 12~29)のアウトライン

- (1) 信者の義務(12~17節)
- (2) 読者は今どこに立っているのか(18~24節)
- (3) 第5の警告(25~29節)

□前回の内容 信仰と訓練 (へブル 12:1~11) を振り返る

1. 信者を忍耐へ導き励ます二つのこと (1~2節)

第一は旧約の信仰者たちの手本

信仰生活は、肉体の死まで続く競走である。走り続けることには苦しみが伴う。しかし、喜びつつ、希望にあふれた忍耐をもって走り続ける

第二はメシアご自身が受けた苦しみ

メシアは、信仰の創始者であり完成者である。→ 信者ひとりのひとりの信仰の成長プログラムを立案し、導き、とりなし、そして完成してくださるお方である。

2. どこまで忍耐すればよいのか (3~4節)

罪に抵抗して血を流すところまで=殉教するまで

3. 苦難の目的 (5~11節)

苦難は、神の子として受ける訓練である。この地上での生活において実際的な聖さ(清さ)をもたらす。

(1) 信仰の忍耐は、二つの結果へ

- ① 平安の実 (反抗的な靈魂が従順な靈魂に変えられる)
- ② 義の実 (義人としての地位にふさわしく、その人の内面が変えられる)

(2) 訓練の結果、信者は平安な義の実を結ぶ。これは 10 節の「聖さにあずからせる」ということの、具体的な現れである。

陣形を崩さず、後退せず、踏みとどまって戦う

苦痛に耐える力という点で、比較的強い者と弱い者とがいる。  
陣形を組むのは、共に励まし合い、助け合うためである。



次の「信者の義務」へと続く

## □信者の義務

## 1. 2つの義務 (12~14節)

(1) 12~13節 教会の中の弱いメンバーに対する義務

(2) 14節 自分自身についての義務

平和を 追い求めよ すべての人との そして 聖別されることを。これなくしては、誰も 主を見ることはないであろう。

地位的な聖化 ⇒ 実際的な聖化

## 2. 信者の霊的状态が下降していく危険な状態の3段階 (15~17節)

(1) 神の恵みから落ちる = その時々に必要な恵みを受けないために、前進できなくなる (参照 ヘブル4:16)

信仰には救いに至る信仰と、苦難に耐え希望を持ち続ける信仰の二つがあったように、恵みも二つ。救いを受けさせる神の恵みと、信仰生活に必要な恵み。

(2) 苦い根が芽を出して悩んだり、これによって多くの人が汚される = 不平不満が口から出て来る

(3) 不品行な者、あるいは俗悪な者となる

「俗悪な」・・・ギの意味は、霊的な事柄を踏みつけるような態度をとること  
→ 信者の務めや特権に対するあからさまな軽蔑を示す

エサウは、不品行な者ではなく、俗悪な者と実例として挙げられている。創25:34「エサウは長子の権利を軽蔑したのである」

「彼には心を変えてもらう余地がありませんでした」・・・原文は「心を変える = 悔い改める場所を彼は見出さなかった」 彼は自分の罪を悔い改めなかった

□読者は今どこに立っているのか

1. 戻ろうとしている先は・・・神殿祭儀。律法はシナイ山で与えられた。そのとき、イスラエルの民とモーセが受けた印象を一言で言えば、恐怖（18～21節）

この場面は、出19章

「手でさわれる山」：地上にある山という意味。天にあるシオンの山との対比

「燃える火、黒雲、暗やみ、あらし、ラッパの響き」：神の臨在の現れ

「ことばのとどろき」：神のことばを直接音声として聞いた

21節：モーセですら、恐れた（参照 申9:19）

2. 捨てようとしているのは・・・特権と恵みの場所。

それを端的に表す例は、天のエルサレム（22～24節）

□第5の警告 近づくエルサレム崩壊により、肉体の死を招くことに対する警告

1. 25節 シナイ山での出来事を思い起こさせる 天から語っておられる方＝御子
2. 26節 近づくエルサレム崩壊について

「このたびは」ギヌン英now、今・・・ローマとの戦役につながる事件は各地ですでに散發していた。ここはハガイ2:6の引用、再臨前の揺り動かしの預言であるが、これを近づくエルサレム崩壊に適用している。

3. 27節 再臨前の揺り動かし→「決して揺り動かされることのないものが残る」

再臨前にハガイ2:6の預言する最後の揺り動かしが起きて、メシアの王国の時代に入る。メシアの王国、そしてそれに続く永遠の秩序は、揺り動かされることはない。

4. 28～29節 結論

信者にはメシアの王国と永遠の秩序に入る約束が与えられている。神の約束に対する信者の応答は、感謝である。慎みと恐れをもって神に喜ばれるように奉仕しよう。他方、神殿祭儀・モーセの律法に回帰する者が向かうところは、恐怖である。「私たちの神は焼き尽くす火です」、これは救いを失うことではない、エルサレム崩壊の裁きに巻き込まれ、肉体の死を受けることである。